

〈マルサス型結婚〉が 歴史事実であるとマズイか？

MacFarlane, *Marriage and Love in England*.
Chapter 13 and Conclusion Part One

鈴木繁夫
名古屋大学国際言語文化研究科

求愛と結婚

- 求愛と結婚の間で起こる最大の事柄
- 配偶者相互間の経済上の詰め
 - 結婚は「取引関係の形成」forming connections、「企業」enterprise、「協定」match

求愛の目的

- (1)結婚に同意する感情的契機を提供する
- (2)結婚への決断のための情報を提供する
- 相互の性格一致の重要性

イングランドの求婚

- (1)個人同士で行う。仲人業はなかった。
- (2)求婚期間は半年から2年間
- 互いをよく知り合う期間があった
- (3)出会いの場所:教会、村祭り
- (4)二種類の婚約:
 - 「未来に関わる」de futuroと「現在に関わる」de praesenti
 - 「現在に関わる」婚約は完全な束縛をともなった。
- (5)「愛の印」の交換:婚約期間中に交わされるものとして、
 - rings, gloves, knitting sticks, spindles, bobbins, whistles, handkerchiefs
- (6)婚約は肉体関係を許した

婚前交渉へのハードル

- 結婚年齢が下がり、人口に対する結婚者数が増加すると、
- 性交歯止めのハードルは低くなる。
 - 説明1：性欲を抑制できないため、年齢が下がり、結婚するため。
 - 説明2：性交をして、相手に結婚を強要する
 - 説明3：子供を産めるかどうかのテスト期間が婚約期間

イングランドの結婚

- (1)結婚式は宗教的意味合いはなかった→世俗の私的契約
 - 教会で結婚することはあっても、祝うために宗教儀式ではなかった。
- (2)儀礼、争乱、蕩尽の混淆
- (3)性交copula carnalisがないなら結婚は成立しない
- (4)多産のおまじないはほとんどなかった
- (5)通過儀礼としての意識も意味も低かった←そもそも子は親元を離れていた

結論： マルサス型結婚は経済成長に貢献する

- (1)晩婚になり、人口抑制。逆に、雇用環境がよいと早婚になる。
- (2)費用対便益比による配偶者選択→親類、階層、地理による縛りが少ない
- (3)結婚は「とっておくもの」であって、ある時点でのみ結婚する「余裕」が出てくる
- (4)配偶者は個人が選択するもの
- (5)結婚は個人の満足のためのもの
- (6)子供は、結婚の目的ではなく、結婚の結果。
- (7)夫婦同士が「友人」であることが望ましい。

マルサス型結婚を誕生させたものとは何か

- 市場資本主義
- →マルサスの確信：マガママな気持ちに許され、不平等な社会制度があると、戦争・飢饉は起こらない。反社会主義。
- 資本主義の精神：欲求を直接に満たすのではなく、欲求を一旦抑圧し欲求の対象をいったん突き放し、合理的にその対象を獲得する。【マクファーレン流の解釈。これではハリソン『古代芸術と祭式』になってしまう】
 - Tawney: acquisitive ethic
 - Weber: the spirit of capitalism
 - Macpherson: possessive individualism

結婚と資本主義

- マルクスの指摘:
- マルサス流の「生き続けるための戦い」struggle for existence[つまり「資本主義の精神」に基づいた生活態度]を、ダーウィンは生物全体に適用した。
-
- エンゲルスの指摘:
- 資本主義[「資本主義の精神」ではない]が人間に物象化を教え、対象を対価で捉えるようにした。
-
- ヴェーバーの指摘:
- 資本主義の合理性が日常生活に浸透するのとは逆向きに、個人レベルでは性愛という非合理・非打算が増大していく。